白蛇伝

――白夫人が永遠に雷峰塔に鎮められしこと

香川　淳子（一九八七年度卒・中国文化史ゼミ）

山外青山楼外楼　山青く西湖のほとり
西湖歌舞幾時休　高楼に宴は果てず
暖風薫得遊人醉　暖風薫りて人を酔わせ
直把杭州作汴州　杭州を汴州（開封）と見る

聞く所によりますと、西湖の景色は、山は緑、水は青く、まことに美しい所であるそうです。むかし、晋の咸和年間に大洪水が起こり、水が湧き上って西門に流れ込みました。突然、水中から身を金色に輝かせた牛が現われたとのこと。すると水は退き、その牛は北山の方に向って行きましたが、それからどうなったかはわかりません。杭州の人々はみな、これを顕化のしるしとして一寺を建立し、金牛寺と名づけました。その西門とは、すなわち今の湧金門のことで、一廟を立てて金華将軍と号しました。当時、一番の名僧で、法名を渾寿羅という僧侶がこの武林郡に来て雲遊し、その風景を愛でてこう申しています――「霊鷲山の前にあった小山が急に見えなくなったと思ったら、こんな所に飛んで来ていたのか」

当時の人々はみな信じませんでした。渾寿羅は「私の記憶では霊鷲山の前にある山を霊鷲嶺といい、この山の洞窟には一匹の白猿がいた。私が呼び出して見せよう」と申します。すると果たせるかな白猿が出て来ました。山の前には亭があり、今でも冷泉亭と呼ばれています。また、孤山という島が西湖の中にあり、かつて林和靖先生がここに隠居し、人を使って土や石を運ばせ、路を造りました。東は断橋に、西は棲霞嶺に接しています。そのため、それは孤山路と呼ばれています。

また、唐代の刺史白楽天は、南は翠屏山、北は棲霞嶺にいたる路を造りましたので、そこは白公堤と呼ばれています。一度ならずも山津波に押し流されたので、白楽天は官銭を用いて修理しました。のちの宋代に、蘇東坡が太守としてやって来ると、二つの堤が洪水で壊されているのを見て、木石を買い、人夫を雇い、さらに堅固なものとしました。六つの橋に朱紅の欄干を設け、堤には桃と柳を植え、春になるとその景色は素晴らしく、まことに絵に描いたようです。後世の人々は、それゆえ、それを蘇公堤と呼んでいます。また、孤山の辺りに造った二つの石橋が水勢を分けていますが、東側を断橋、西側を西寧橋と申します。

隠隠山蔵三百寺　ひっそりと山は三百寺を蔵し
依稀雲鎖二高峰　かすかな雲に依りて二高峰が鎖る

さて、西湖の美しい風景や仙人の古跡の話をしましたが、私が今日話しますのは、一人の男ぶりのよい若者が西湖をぶらぶらとしていますと、二人の婦人にめぐり遇い、人から人へとその話が伝わり、花街柳巷を大騒ぎさせた話であります。その話は、才人

の筆によって一篇の風流な小説となりました。そして、その若者は名を何と申し、どのような婦人にめぐり遇い、どのような事件を起こしたのでしょうか。ちょうど恰好な詩があります――

清明時節雨紛紛　清明の時節、雨は紛々たり
路上行人欲断魂　路上の行人、魂を断たんとす
借問酒家何処有　借問す、酒家はいずくに有るか
牧童遙指杏花村　牧童、遙かに指す杏花の村

さて、宋の高宗が南渡されました紹興年間に、杭州臨安府の過軍橋黒珠巷の近くに一人の役人が住んでいて、姓を李、名を仁と申して、南廊閣子庫（兵站庫）の募事官を勤め、また、邵太尉の下で経理の事務をとっていました。妻には一人の身内がおり、許宣と申します。許宣の生家は生薬店を開いていましたが、幼い頃、父母とも亡くなり、今では、母方の叔父の李将仕が経営する生薬屋で番頭を勤め、当年二十二歳になります。この生薬屋は官巷口にありました。

ある日、許宣が店番をしている所に一人のお坊さんがやって来て門前に立ち、合掌して申します――「私は保叔塔寺の僧です。先日も饅頭と蒸菓子を持って参上しましたが、清明節も近づきましたので、ご先祖様の供養のため、どうか寺にお詣り下さい」

許宣は「はい、必ず参ります」と申しますと、お坊さんは帰って行きました。

許宣は夕方には姉夫婦の家へ帰ります。彼は独り者ですので、姉の家に世話になっているのです。その夜、姉に向ってこう言いました――「今日、保叔塔のお坊さんが来て、お寺にお灯明を上げに来るようにといわれました。明日、ご先祖様のお詣りに行って来ようと思います」

つぎの日、許宣は早起きして、紙馬、蠟燭、経幡、紙銭の束などを買い、朝飯を食べ、新しい服や靴、靴下にかえ、紙馬やその他のものを風呂敷に包み、官巷口の李将仕の店へやって来ました。李将仕はそれを見てどこへ行くのか尋ねます。許宣が「私は、今日、保叔塔へ焼香へ行って、ご先祖様の供養をしたいので、叔父さんどうか一日暇をいただきたいのです」というと、李将仕は、「行っておいで、早く帰って来なさい」と言います。

許宣は店を出て寿安坊や花市街を通り、井亭橋を過ぎて清河街のうしろの銭塘門に行き、石函橋を渡り、放生碑の前を通り過ぎ、保叔塔寺へやって来ました。そして饅頭を届けてくれたお坊さんを訪ねて、懺悔をしてお経をあげてもらい、紙銭を焚き、それから仏殿へ行って大勢のお坊さんがお経を誦んでいるのを見学しました。そして、お祓いをしてもらい、お坊さんと別れました。寺を出るとぶらりと西寧橋を渡り、孤山路、四聖観から林和靖の墓を見て六一泉へとやって来ました。

ところが思いがけないことに、西北から雲が出て来て、東南の空に霧が立ちこめ、ぱらぱらと雨が降り出し、次第にひどくなります。ちょうど清明節でもあったので、天の神様が時節に欠かせない開花を促す雨を降らせたのでしょう。雨はざあざあと降ってなかなか止みそうにありません。許宣は靴が濡れたので、新しい靴と靴下を脱いで、四聖観を出て船を捜しますが一隻も見つかりません。途方にくれていると、一人の老人が一隻の船を漕いで通りかかります。許宣は密かに喜んでそれを見ますと、折よく張じいさんでしたから、

「張じいさん、僕を乗せてくれないか」
と呼びかけました。老人はその声を聞き、見れば許宣なので、船を岸へ漕ぎつけます。
「許宣さん、濡れてしまったね。どこまで行くのかい」
「湧金門へつけてくれないか」
老人は許宣を支えて船に乗せ、岸を離れると、船を漕いで豊楽楼へ近づいて行きます。ところが十数丈も行かないうちに、岸から呼びかける声が聞こえます。
「おじいさん、お船に乗せて下さいな」
許宣が見ると、一人の婦人です。孝頭髻〔喪中の髪型〕を結い、黒髪には飾りのない かんざし や櫛をさして白絹の上衣に細麻の裙(スカート)をはいています。この婦人の脇を支えて肩を貸しているのは一人の女中で、青い衣を着て角髻を結い、二つの真っ赤な頭鬚をつけ、頭飾りを二本さし、手には包一つを持って、船に乗せてくれと言っています。
張じいさんが許宣に「物にはついでということもあろう。一緒に乗せてやりましょう」と言うと、許宣も「ああ、乗せておやり」と言います。
じいさんはさっそく船を岸に近づけます。その婦人は女中と一緒に船に乗り、許宣を見ると赤い唇を少し開き、二列の露のような歯をあらわして深々とおじぎをします。許宣はあわてて立ちあがり、礼をかえします。その婦人と女中は客室へ腰をおろしますが、婦人は許宣を見てしきりに秋波を送って来ます。許宣はこれまで真面目な人でしたが、見れば、花のような美人ですし、しかもそばにきりとした美しい女中がいるので、心を動かさずにはおれません。
「失礼ですが、あなたさまのお名前は何とおっしゃいますか」とその婦人はたずねます。
「私は姓は許、名は宣と申します。兄弟の惣領です」
「お宅はどちらですか?」
「住いは過軍橋の黒珠巷です。生薬屋に勤めています」
婦人が何回も問うので、許宣もこちらから一つ聞いてみようと思い、身を起こして――「不躾ですが、お名前は、また、お住いはどちらですか?」
婦人は答えて言いました――「私は白三班の白直殿の妹でございます。役人の張氏に嫁ぎましたが、不幸にも夫は亡なり、この雷嶺に葬ってあります。清明節も近づいてまいりましたので、今日は女中を伴って、お墓参りに行きましたのですが、生憎雨にあってしまったのです。あなたの船に乗せていただかなければ、困ってしまいましたわ」
それからいろいろ話しているうちに、船は岸に近づきました。するとその婦人は申します――「私、取り急いでおりましたので、財布を持って来るのを忘れてまいりました。まことに済みませんが船賃をお立て替え願えませんか。必ずお返ししますから」
「奥さん、構いませんよ、わずかな船賃です。気にすることはありません」
許宣はそう言って船賃を払いました。雨はなかなか止みそうにありません。許宣は婦人の手を取って岸へ上がりました。婦人は申しました――「私の家は箭橋の双茶坊巷にございます。ちょっとお寄りになってお茶でも召し上って下さいませ。船賃をお返し

しますから」
「そんなことは気にかけないで下さい。もう遅いですから、日をあらためて伺いましょう」
そこで婦人は女中と帰って行きました。
許宣は湧金門に入り、人家の軒下づたいに三橋街まで来ました。そこに一軒の生薬屋があり、李将仕の弟の店なのです。許宣が店の前まで来ると、ちょうど李の弟が立っていて声をかけました。
「許宣、こんな夜遅くどうしたのかい」
「保叔塔にお参りに行って雨に降られたんです。傘を一本貸していただけませんか」
李の弟はそれを聞いて、「陳じいさん、許宣に傘を出しておくれ」と言います。陳じいさんが傘を一本持って来ると、開いてみせて言いました。「許宣さん、これは清湖八字橋の老舗の舒家で作ったもので、骨は八十四本、柄は紫竹の上等な傘ですよ。少しも破れていませんから、どうか壊さないで下さいね、お願いしますよ」
「ご心配なく」
許宣は傘を受け取ると、羊壩頭を出て後市街巷まで来ます。すると、「許宣さま」と呼びかける人がいます。ふり返ると、沈公井巷の小さな茶屋の軒下に一人の婦人が立っています。なんと同船した白夫人ではないですか。
「奥さん、どうしてここに」
「雨が止みませんので、靴がすっかり濡れてしまいました。青青に言って家に傘と靴を取りに行かせたのです。すっかり暗くなってまいりましたわ。どうかちょっと立ち寄って下さいませ」
許宣と白夫人は相合傘で四ツ角まで来ました。
「奥さんはどちらまでですか」
「橋を渡って箭橋までまいります」
「奥さん、私は過軍橋へ行くのです。すぐ近くですから傘をお使い下さい。明日、私が取りに伺いますから」
「まあ、すみません、ではご親切に甘えて」
許宣は軒下づたいに雨の中を帰ると、ちょうど姉夫婦の下男の王安が、雨靴と傘を持って迎えに行ったのですが、会えずにもどって来たところでした。家に着くと、夕飯を食べ、その夜は、あの婦人を思って寝返りばかりうち、眠れません。夢の中でも、昼間見たように、婦人は情意細やかなものでした。鶏の声にはっと目を覚すと、それはあの南柯の夢でした。——

心猿意馬馳千里　心は猿か馬のように千里を馳け
浪蝶狂蜂鬧五更　蝶や蜂のように夜明けにときめく

夜が明けると、起きて身仕度をし、朝飯を食べて店に行きましたが、心乱れて働く気持もなくなっていきます。午後になって、「ひとつ嘘をついて、傘を返してもらいに行こうかな」と考え、許宣は帳場に坐っている老人に、
「義兄さんが、使いにいってほしいから早く帰ってこいといいましたので、半日暇をいただきたいのですが」と申しますと、主人は、「いいよ、明日は早く来ておくれ」と言います。許宣は挨拶をして、箭橋双茶坊の角へ来て白夫人の家を探しました。ところが方々尋ねても誰ひとり知る人がおりません。困っていると、白夫人の女中の青青が東の方からやって来ます。
「お姐さん、君の家はどこなんだい、傘を取りに来たよ」

「旦那様、私についていらして」
許宣は青青のあとについて行きますと、少しも行かぬうちに、
「ここですよ」と言います。
許宣が見ると、それは一軒の二階家で、両開きの大門があり、なかには街に面した四枚の格子窓、目の細かい朱の簾をかけ、ぐるりと十二脚の黒塗りの椅子があり、四幅の名人の山水の古画が掛っています。向いは秀王の邸宅の塀になっています。
女中は簾の中に入り、「旦那様、どうぞお入り下さい」と言いますので、中へ入って行くと、青青は低い声でそっと申します。
「奥様　許宣様がお見えになりました」
白夫人は奥の方から、「奥にお上げして、お茶を差し上げておくれ」と申します。許宣がためらっていると、青青は何度も許宣を勧めます。許宣が奥へ入って行くと、四枚の暗い格子窓に青い木綿のカーテンがかかり、衝立を立て、机の上には虎鬚菖蒲の鉢があり、両側には四幅の美人画、中央には神像が一幅掛かっており、テーブルには古銅器の香炉型の花瓶が一つあります。
若い未亡人は深々とお辞儀をして、「昨夜は大変お世話になりました。はじめてお目にかかったのに、本当に感謝にたえません」
「たったあれだけの事です。気にかけないで下さい」
「さあ、お茶をどうぞ」
お茶を飲み終えると、また「ちょっと粗酒を差し上げたいのですが。ほんの気持ちですけど」と婦人は申します。
許宣が辞退しようと思っているうちに、青青はご馳走の品をどんどん運んで来ます。
「奥さん、こんなにご馳走を、本当に恐れ入ります」
数杯飲むと立ちあがって、「今日はもう遅いですし、家も遠いですからお暇します」
「あなた様の傘を、昨夜、親戚が借りていったのです。もう少し召し上って、取りに行かせますから」
「いえ、もう遅いですからお暇します」
「もう一杯召し上って」
「本当にご馳走していただいて、ありがとうございました」
「お帰りになるのでしたら、あの傘を、明日とりに来て下さいませ」
許宣は別れて家に帰りました。
翌日、また店に来て働いていましたが、言訳をつくって、白夫人の家に傘を取りに行きました。白夫人は彼を見ると、また、お酒の用意をして、もてなそうとします。
「奥さん、傘を返していただければいいのです。そんな気を使わないで下さい」と許宣は言いますが、夫人は、「もう、すでに支度が整いました。まあ一杯どうぞ」と言います。許宣はやむなく席に着き、夫人は酒をついで許宣に渡し、桜桃のような口を開き柘榴のような歯を見せ、美しい声で顔中に笑みを浮かべ、言いました——
「許宣様、仙人の前では嘘はつけぬと申します。私、夫を亡くしてから、きっとあなた様と前世からの因縁があったのです。はじめて会った時から好意を持っていただきました。ちょうど、あなたが私を思って下さるように、私も思っています。済みませんが仲人を捜して下さいませんか。あなたと百年も夫婦でいられたら、それこそ生きていた甲斐があったというものですわ。どんなに嬉

しいでしょう」
許宣は夫人がそう言うのを聞くと、心の中で考えました――
「これは、まさに良縁だ。もしもこんな人を妻に迎えたら、どんなにいいだろう。私自身は十分肯けるが、ただひとつ困った事がある。私は昼は李将仕の家で番頭をつとめ、夜は義兄の家に泊っている。少々金を持っているが、せいぜい着物を作れるくらいだ。どうやって妻をもらう金が得られようか、とうてい得られない」とひとり考えに沈んでいると、白夫人は申しました。
「どうしてご返事なさらないの」
「気持ちは嬉しいのですが、実は本当を申しますと手本不如意で、気持ちは受けかねます。」
「そんな事は簡単です。私はあまるほど財産はありますから、ご懸念なく」――そう言って青青を呼んで、「白銀を一枚取っておいで」と言います。すると青青は手摺りにすがって梯子を登り、ひとつの包みを持って来て、白夫人に手渡しました。
「許宣様、このお金をお使い下さい。足りなければまた取りに来て下さいな」とみずから許宣に手渡します。それを受け取って包みを開いて見ると、五十両の真っ白な銀子です。それを袖に入れると立ち上っていとまを告げました。青青が返す傘を許宣は受け取ると、別れを告げ、まっすぐ家に帰り、銀子をしまいました。その夜の話はもうありません。
明朝、起きると家を出て官巷口へ行き、李将仕に傘を返しました。許宣は小粒銀で、一羽の上等な焼き鵝鳥（がちょう）、新鮮な肉と魚、やわらかい鶏や菓子の類を買い、手に下げて帰宅しました。それから、酒を一樽買って、女中に命じて支度させます。その日はちょうど義兄の李募事が家にいたので、料理ができあがると、義兄と姉にご馳走したいと言いました。李募事は、許宣が自分にご馳走するというので驚きました。「今日はなんで散財するんだろう。日頃酒杯も見ないのに今朝は怪しいな」
三人は型通り席につき酒を数杯飲むと、李募事は言いました。
「許宣君、何もないのに君は何で散財するんだい」
「義兄さんには感謝しています。笑わずに聞いて下さい。たったこれだけの事です。義兄さんと姉さんには長いあいだお世話になって感謝しています。ところで、一客は二主を煩わさずと申します。私もどうやら成長し一人前になりました。もしも先々子供が無ければ大変だと思うのです。それでちょうど良い縁談があったので、義兄さんと姉さんにお世話を願って身を固めることができれば良いのですが」
姉夫婦はその話を聞くと腹の中で考えました――「許宣は、日頃、毛一本も抜こうとしないのに、今日はこんなに散財すると思ったら、私に妻を世話してくれというわけだったのか」
夫婦は見つめ合ったまま返事もしません。酒を飲み終えると許宣は働きに行きました。
二、三日過ぎると、許宣は、「姉さんはどうして何も言わないのだろう」と考え、ある日、姉に言いました。「義兄さんと相談して下さいましたか」
「いいえ」
「どうして相談してくれないの」
「この事は、他の事とは違って慌ててはできないよ。それに義兄さんは、この頃、心配が多くて草臥（くたび）れているし、心配かけてはい

けないと思って言い出しかねているのよ」
「姉さん、心配することはありませんよ。何も難かしい事はありません。兄さんにお金の心配をかけると思って心配しているんでしょう」
許宣は立ちあがると寝室へ行き、箪笥を開けて白夫人の銀子を出し、姉に渡しました。
「心配はいりません。これで義兄さんにたのんで下さい」
「おまえ、叔父さんの所で長く番頭をやってこんなに貯めていたの。これで結婚したくなったわけね。私がいいようにしてあげましょう」
さて、李募事が帰宅すると、姉は「あなた、弟が結婚したいのももっともです。こんなに貯めていたのですよ。これを細かく換えて使えと私に言うの。私達でこの縁談をまとめてあげましょう」
李募事はそれを聞くと、「なるほど、よくそんなに貯め込んだね。私に見せてごらん」
そう言われて、妻がいそいそと銀子を持って来ると、夫に渡します。李募事は手に取って見、裏表ひっくり返して、その上に彫ってある記号を見て、あっと驚きました。
「大変だ、一家全員死んでしまうぞ」
「あなた、一体どういう事ですの」
「数日前、邵太尉の蔵から錠前もそのままで、壁に穴ひとつなく、大きな五十枚の銀子がなくなってしまったので、いま臨安府の役所に申し出て、犯人を厳重に捜査中だが、何の手懸りもなく、多くの人が困惑している。犯人捜査の高札には、〝犯人および銀子を届けた者は褒美として銀五十両、知って届けない者、および犯人をかくまった者は、正犯でなくても、全家辺境に送り、軍務に充てる〟とある。この銀子は高札に出ている記号とぴったり合う。正にこれは邵太尉の銀子だ。ちょうどいま厳しく捜査中で、これは〝身にふりかかる火は自分ではらえ、身内でもかまえない〟というわけだ。明日にでも露見すれば、いいわけは難しい。借りたものだろうと盗んだものだろうと、構うことではない。あれが痛い目にあっても我々に累がおよばないようにしなくては。早く銀子を届けて一家の害を免れよう」
妻はそう言われて、開いた口がふさがらず眼をきょとんとさせています。すぐにその銀子を持って臨安府へ届け出ました。大尹はその話を聞くと一睡も眠れませんでした。翌日、さっそく何立という部下を逮捕にさし向けました。何立は同僚と腹心の部下を従え、官巷口の李家生薬店へ行き、犯人の許宣の逮捕に向いました。帳場に行くと、わあっと叫んで許宣を縄で縛り上げ、ドラや太鼓を打ち鳴らして臨安府へと引き立てて行きました。韓大尹が登庁して来て、許宣を引き出しひざまずかせ、「打て」と叫びます。許宣は、「お役人様、刑を受けるいわれはありません。何の罪を犯したのでしょう」と言うと、大尹は怒って、「真犯人が何を言うか。いまさら無罪と申し立てるのか。邵太尉の蔵の錠前も封もそのままに、大きな銀子五十枚がなくなった。このたび李募事から届け出があったが、残る四十九枚もおまえの所にきっとある。封に手をつけず銀子が見えなくなったところを見ると、おまえは妖術使いだろう、もう打つ必要はない、穢い血〔妖術を解くための鶏犬の血〕を持って来い」と大声で命じます。許宣、さてはと思い、「私は妖術使いではありません。何もかも申し上げます」

「よし、この銀子はいったいどこから来たのか」
許宣は、傘を借りたこと、取りに行ったことなどを詳しく話しました。大尹は「白夫人はどんな人で、どこに住んでいるのか」と尋ねます。
「女が言うには、白三班白殿の妹で、箭橋の近くの双茶坊巷で秀王様のお屋敷の屏の向いにある黒塗りの二階家に住んでいます」
大尹はすぐに捕手の役人の何立に命じ、許宣を引き立てて双茶坊巷へ行きます。何立は命をおびて多くの部下をひき連れ双茶坊巷へつき、見ると門前には四つの窓、中央の二枚の扉、門の外に高い台階がありますが、板の前はごみ溜めで一本の竹を横に打ちつけてあります。何立はその様子を見てあきれていました。さっそく隣人をつかまえて来ます。左隣りは花作りの丘大、右隣りは皮革作りの孫某です。孫某は急な事でびっくり仰天してひっくり返ってしまいました。
隣人が皆やって来て、言います——「ここには白夫人なんて人はいませんよ。この家には、五、六年前、毛巡検という人の一家がいましたが、みな流行病で死にました。日が高い時でもよく幽霊が物を買いに出て来ます。人は住んでおりません。何日か前にも、どこかの気違いが門に立ち何やら言っていましたが」
何立は部下に命じて竹を解かせると、中はひえびえとし、一陣の風が起こり、生ぐさい臭いを運んできます。一同この臭いにぎょっとして、うしろに下がります。許宣はそれを見ると、声も立てられず、ただあきれています。部下の一人に胆のすわった人がいて名を王といい、次男坊で、たいへん酒好きなので、みなが「呑兵衛の王二」と呼んでいます。王二は、「みな、おれについて来い」と言って一斉に入って行きます。見れば、板壁も衝立もテーブルもみなそろっています。階段まで来ると、王二を先頭にして一斉に登って行きます。二階には三寸ほど塵が積もっています。部屋の入口へ来て戸を押し開けて見ると、寝台には一張の帷がかかっており、箪笥やつづらもそろっています。見れば、花玉のような白い服を着た美貌の夫人が座っているではないですか。一同それを見ると思い切って前に進めません。
「奥さんは神かそれとも幽霊か、我々は臨安府大尹の命令で逮捕しにまいった。その方と許宣と法廷で対決させるのだ」
夫人は身動きせず、じっとしています。呑兵衛の王二は言いました——「みなが思いたって立ち向わないのなら、こうすればよい。酒を一樽持って来て飲ませてくれ、私がひっ捕らえて大尹の前につれて行ってやる」
一同は、二、三人の者に言いつけて、さっそく一樽の酒を王二に持って来させると、王二は樽の口を開け飲み干します。
「俺が犠牲になるぞ」とその空の樽を帷の中へ投げつけますと、その瞬間、青天の霹靂のような大きな音がして、人々はみな驚きました。起き上がって見ると寝台の上に夫人の姿はなく、ただ光り輝く銀子があるのみでした。人々は進み出て「良かった」と言い、数えると四十九枚あります。「私達はこの銀子を大尹に見せに行こう」と銀子をかついで、みなで臨安府へ行きました。
何立がどんな事が起こったか大尹に申し上げると、「これは、すなわち妖怪である。まあよい。隣人は無罪だから帰してやりなさい」と大尹は命じました。
さっそく五十枚の銀子を持たせて、邵太尉のもとに送り、理由

を一々報告しました。許宣は「すべからざる事をした」という咎で、重い方の罪に照らして杖で打たれ、入墨こそ免れましたが、牢城営に送られて、一定期間、労役に服する事になりました。牢城営は蘇州府の管轄下です。

李募事は自分が許宣を訴えたので気が咎め、邵太尉にいただいた五十両の銀子をそっくり義弟に与えました。また、李将仕は手紙を二通書いてくれ、一通は押司（獄吏）の范院長に宛て、一通は蘇州吉利橋のたもとに宿を開いている王という人に宛てたものです。許宣は、痛哭して義兄夫婦と別れ、枷をかけられて二人の護送人とともに杭州を離れました。東新橋につくと航船をおりて、やがて蘇州に着きました。李募事に書いてもらった添状を持って、范院長と王に会いに行きました。王は彼のために役所の上下に賄賂を使ってくれ、二人の役人が蘇州府へ派遣されました。公文書が下がり、犯人を引き渡す事になり、護送人は請状をもらって帰って行きました。おかげで范院造と王亭主が保証人になって入牢せずに済みました。そして王亭主の門前の二階に泊ることになった許宣は、気持ちがふさいで壁に詩を一首書きました——

独上高楼望故郷　独り高楼に上りて故郷を望む
愁看斜日照紗聰　愁ぐて見る、斜日の紗窓を照らすを
平生自是真誠士　平生みずから真誠の士と思いしに
誰料相逢妖媚娘　誰か想う、妖媚の娘に逢うかを
白白不知帰甚処　白白〔夫人〕いずこに帰りしかを知らず
青青豈識在何方　青青豈、いずこに在るをか識らん
抛離骨肉来蘇地　骨肉〔肉親〕を抛げ、蘇地に来たりて
思想家中寸断腸　家中〔家族〕を想えば腸は寸断さる

話があれば長くなるが、ないと短い。まことに光陰矢のごとく月日は梭のごとしで、王亭主の家に住んで半年になりました。九月下旬のことです。亭主の王がちょうど門前に立って道行く人を見ていると、向うの方から一挺の轎が来て、そばには女中がついています。

「ちょっとすみませんが、こちらは王さんの家ではありませんか」——王亭主があわてて「ここがそうですが、どなたをおさがしですか」と言いました。

すると女中は、「私は臨安府から来た許宣様をたずねて来たのです」

「ちょっとお待ち下さい。私が彼を呼んで来ますから」と王亭主は言います。

その轎は門前にとまります。亭主は入って行くと、「許宣さん、あなたをお尋ねの人ですよ」と呼びます。許宣はそれを聞くと走り出て亭主と門前に出て来て見ると、なんとお供は青青で、轎には白夫人が座っているではありませんか。許宣は見るなりどなりつけました——

「こん畜生！　おまえが銀子を盗んだおかげで、私はとばっちりを食い、どんな酷い目に会ったことか。どこすることもできず、今ではこんなふうだ。それをまた追いかけて来てどうするつもりだ。この恥知らずめが！」

すると白夫人は申しました——「許宣さま、怪しむことはありません。今日はわざわざそのことを弁解しに来たのです。まず家に入ってお話ししましょう」

白夫人は青青に包みを取らせ、轎から下ります。許宣は、「おま

えは化物だ。入ってはいかん」と言って門に立ちふさがります。
白夫人は主人に向って深々とお辞儀をして――「私は決して騙したりしません。私がどうして化物でしょう。衣には縫目があり、日に向えば影もあります。不幸にも夫に先立たれたばかりに、私はこんなにばかにされているのです。このことは亡夫が前にしたことの因縁で、私のした事ではありません。あなたが私を怨んでいるだろうと思い、わざわざ言訳をしに来たのです。それさえわかって下されば、すぐにでも帰りたい気持ちなのですよ。」
主人はこう言います――「まあ奥様に入ってもらって、話したらどうですか」
白夫人も、「私、一緒に中に入ってご主人の奥様にお話しします」と申します。門前で見物していた人たちもみな帰って行きました。許宣は奥に入って、主人夫婦に言いました――「私は、こいつが役人の銀子を盗んだおかげで、かくかくしかじかで、役所に訴えられ、今ではこんな所に流されている。まだ何を言いたいのか」
「亡き夫が残してくれた銀子を、私は好意であなたに差し上げたのに、私もあれがどこから来たのか知らなかったのです」
「役人が捕えに行った時、なんで門の前はごみ溜だったのか。帷の中で物音とともに、おまえは見えなくなったではないか」
「私はあなたがこの銀子のために捕まったと聞いて、あなたが私の事を言って役所に引き出されたら恥しかったので、私は困ったあげく、華蔵寺前の伯母の家に逃げました。人に頼んでごみを門前に積み、銀子を寝台の上に置いておかせました。隣近所の人には嘘を言わせたのです」
「おまえが逃げたので、私は罪を受けたんだ」
「私が銀子を寝台に置いたのは、あなたにただ良かれと思ってしたのです。そんなことになろうとは思いもよりませんでした。私はあなたがここへ流されたと聞いて幾許かのお金をこさえ、船に乗って、ここへあなたを訪ねて来ました。これでみな言訳も話しました。私は帰ります。これで私とあなたとの前生の夫婦の縁もなくなったのでしょう」
すると王亭主は、「奥様、遠い路をここまで来たのですから、このままお帰りなるなんて。どうぞここで何日かお泊りになって、その方がいいですよ」と勧めます。
青青もこう申します――「ご主人もお引き止め下さっています。奥さま、何日かお泊りになってはいかがでしょう。以前は許宣様とは結婚の約束をなさった仲でしょう」
白夫人は、すぐ言いました――「恥かしいわ、どうせ私は誰からも捨てられたのよ。今度はただ訳を言いに来ただけなのに…」
王亭主は、「すでに許宣さんと許し合った仲なら、帰ることはありません。どうぞここにお泊り下さい」――そう言って、轎を返しました。
数日が過ぎると、白夫人は、王亭主の女房にうまく取り入ってしまいました。そこで女房は亭主に勧め、許宣に話をして、十一月十一日に婚礼の式を挙げさせ、ともに百歳の老人になるまで契ることにきまりました。
時はまたたくまに過ぎ、早くもその吉日となりました。白夫人は銀子を取り出し、王亭主に祝宴の仕度をたのみ、二人は天地を拝して結婚しました。酒席の後、ともに閨房に入ります。白夫人

は、人をとろけさせるような媚態の限りをつくし、許宣は神仙に巡り会ったように喜び、ただ相見ることの遅かったのを恨みました。ちょうど楽しんでいるところに、ふいに鶏が三唱し、東の空が白んできます。

歓娯嫌夜短　楽しい夜は短くて
寂寞恨更長　寂しい夜は長いもの

この日からというもの、夫婦二人は魚と水の如く、一日中、王亭主の家で快楽にふけるのでした。

月日はたち、早くも半年ほどが過ぎました。時は春、天気はやわらいで、花は錦のように咲き、車馬は往来し、街は賑かです。許宣は亭主にたずねました――「今日はどうしてこんなたくさんの人出なんですか。大変賑かですね」

「今日は二月十五日、男も女もみな臥仏様を拝みに行くのです。あなたも良かったら承天寺へちょっと行ったらどうですか」

許宣はその話を聞くと、「じゃ、妻にちょっと話して行ってみようかな」と、二階に上り、白夫人に言いました――

「今日は、二月十五日で、男も女も臥仏様にお参りに行くんだよ。私もちょっと見て来ようと思うんだ。誰か訪ねて来たら、留守だと言いなさい。出て行って会ったらだめだよ」

すると、白夫人は、「そんなに見に行きたいの。家にいた方がよくはないの。見たってしょうがないわ」

「なあに、ちょっと行ってすぐ帰って来るよ、かまわないさ」と言って、許宣は店を出ますと、何人かの友人と一緒に、お寺へ臥仏様を見学に行きました。廊下が連らなる殿をぐるりと見て、寺を出て来ますと、道士の服をまとい、逍遙巾をかぶって黄色い絹の帯をしめ、熟麻の靴をはいた一人の道士が寺の前で薬を売り、符水をくばっています。許宣が立ち止まると、その道士は、「わしは終南山の道士で、いたる所を雲遊して符水をほどこし、病気や災厄から救っているのじゃ。何かある方は前に出なさい」と言っています。道士は人ごみの中に許宣を見つけると、一筋の黒気が頭上にあるので妖怪がつきまとっているにちがいないと気づき、声をかけました――

「あなたには、近くに一匹の妖怪がつきまとっている。その害は軽くはありませんぞ。私があなたに二枚、霊符をさし上げて、あなたの命をお救いしよう。一つは、夜中に焼き、一つは、自分の頭髪の中に入れなさい」

許宣は護符をもらうと、考えました――「私は、八、九分通り、あの女は妖怪と疑っていたが、それは本当なのだ」

道士に礼を言うと、店に帰りました。

その夜、白夫人と青青が寝てしまうと、許宣は起き上がって、「もう十二時だろう」と、一枚の護符を自分の髪の中に入れ、もう一枚をまさに焼こうとしていますと、白夫人はため息をついて言いました――「許宣様、私とあなたは、長い間夫婦でした。それなのに、まだ、私の想いを無視して、他人の言うことを信用し、こんな夜中に護符を焼いたりして、私を取り鎮めようというのね、さあ、この護符を焼いてごらん」。そう言うと、護符を奪い取って、焼いてしまいました。しかし、全くなんのこともないのです。

「どうですか。私はこれでも妖怪？」

「私の知ったことではない。臥仏寺前の一人の雲遊道士が、おまえは妖怪と言ったのだ」

「では、明日あなたと一緒にちょっと行って、どんな道士か見てきましょう」

つぎの日、白夫人は早く起きると、お化粧をし、白い衣服を身につけると、青青に二階にいて留守番をするように言いつけると、夫婦二人で臥仏寺の前へやって来ました。多勢の人に囲まれている道士が符水をほどこしています。すると、白夫人は両眼を妖しく光らせながら、道士の前に進み寄ると、大声で言いました——「あなたは何て失礼なの。出家しているのに私の夫に向かって、私を妖怪呼ばわりして！　さあ、護符を書いて、私をつかまえてみなさい」

その道士はこう申します——「わしが使うのは五雷天心正法〔道教の法術の一種〕で、すべての妖怪はわしの護符を飲み込むと、たちまち真の姿を現わすのだ」

「この皆様の目の前で、あなたの書いた護符を飲んでやるわ」

道士は護符を書くと渡します。白夫人はそれをすぐに飲み下します。人々はみな見ていますが、何の変りもありません。人々は、「こんなご婦人が、なんで妖怪なのだ」と、口々に道士を罵ります。道士はぽかんと口をあけて目をきょとんとさせ、すっかり恐れ入っています。

白夫人は申しました——「皆さん、この人は私を捉えることはできません。私は小さい時に奇術を習いましたから、ひとつ道士に試してみましょう。皆さん、見ていて下さいな」。そう言って、口の中で何やら唱えると、すると道士は、まるで誰かに縛られたようにひとかたまりに縮まって空中にぶら下がりました。人々はあっと驚き、許宣はただ呆れていました。

「もしも皆さんの前でなければ、この道士を一年でも吊しておくんですが」。白夫人は息を吹きつけます。すると、道士はもとのように下におり、父母から両翼をもらわなかったのを恨むかのように、飛ぶように逃げて行きました。人々はみな、散って行き、夫婦はまた家に帰りました。

日常の暮らしの金銭は、すべて白夫人が用意してくれました。まさに、夫唱婦随、朝歓暮楽です。そのようにして、光陰矢の如し、四月八日のお釈迦様の誕生日となりました。街では栢亭浴仏をかつぎ回って、家々で布施をつつんでいます。許宣は、主人に「ここは、杭州と同じですね」と言っていますと、隣の鉄頭という若者が来て、「許宣さん、今日は承天寺で仏会があります。一緒にちょっと見に行きませんか」とさそいます。許宣は、奥へ入り、白夫人に話すと、「なにかおもしろい事でもあるの。あなた行けば」と言います。

「ちょっと行って、憂さを晴らすだけだよ」

「いらっしゃるなら、その服は古くなっていてよくないわ。着換えていらっしゃいな」。そう言って、青青を呼ぶと、新しい流行の服を取って来させます。許宣が着てみると、長くも短くもなく、まるで体にあわせたようでした。黒頭巾をかぶり、うしろを一組の白玉の環で止めて、青い絹の道袍をはおり、黒い靴をはき、手には精巧な金で美人画を描いた、珊瑚がさがった薄絹の扇を持ちました。その身なりは、上から下までがきちんと整っています。白夫人は、まるで鶯がさえずるように言いました——「あなた、お早くお帰りになってね、私、とっても気掛りですもの」

許宣は鉄頭をともなって、承天寺に仏会を見物に行きます。そのすばらしい男ぶりを、人々は大声で誉めました。すると、それを聞いた、ある人が、「昨夜、周将仕の質屋の蔵から四、五千貫の金銀の装身具がなくなった。紙に書き出して役人に訴え、捜査しているが、犯人はまだ捕っていないそうだ」と話しています。許宣は、それを聞きましたが、その意味はわかりません。自分は鉄頭とお寺へ向いました。その日は、焼香に来る老若男女で往来は大変賑やかです。

「妻に早く帰るように言われたから、帰ろうかな」と言って、人ごみの中でふり返りますと、鉄頭が見えないので、一人で寺の門を出て来ました。

すると、腰に鑑札をさげた役人の服を着た五、六人の人がいます。その中の一人が許宣を見ると、みなに言いました。「おい、あの男の着ているものや持っているものは、あの話のもののようだな」

その中の一人に、許宣と知り合いがいて、「許宣さん、扇をちょっと見せて下さい」と言います。

許宣は、計略とは知らず、扇を役人に渡しました。すると、その役人は、「皆さん、この扇の柄につけるかざりは、書き付けと同じだ」と言うと、人々は一斉に、「召しとれ」と叫んで、ついに、許宣をぐるぐる巻きにしてしまいました。それはまるで——

数隻皂鵰追紫燕　数羽の黒鷲に追われた燕か
一羣餓虎啖羊羔　一群の餓虎に食われる羊か

といった具合です。

許宣は、「皆さん、間違えてはいけません。私は罪はありません」と言いますが、役人は、「そうであるかないかは、役所の周将仕の所に行って詳しく話すんだ。この店内から五十貫の金や玉の装身具、白玉の環、上等の扇子、珊瑚の飾りが紛失した。おまえは、それでもまだ無罪と言うのか？　証拠はあがっているのだぞ、何をつべこべ言うか。本当に図図しいやつだ。我々役人をなめているのか。見れば頭にかぶっているもの、身につけているもの、足にはいているもの、すべてあの家のものなのに、公然と外出するとは、まったく恐れを知らないやつだ」

許宣は、あっけにとられ、暫らく声も出せません。

「いかにもそのようですね、さしつかえありませんよ、盗人はわかっていますから」

「自分で蘇州府の役所に行って、詳しく話すのじゃ」

つぎの日、大尹が登庁すると、許宣はその前に引き出され、訊問されます——「周将仕の蔵から盗んだ金や玉や宝石は一体どこにある。事実を白状すれば、拷問は免じてやろう」

「申し上げます。私が着ている衣服はすべて妻の白夫人のものです。どこから来たものかどうして知りましょう。どうかご明察下さい」

「妻は今どこにおる」

「吉利橋のたもとの、王亭主の家の二階におります」

大尹は、すぐに袁子明という逮捕吏に命じて、許宣を引き立てて連行して行きます。

しばらくして、袁子明が王亭主の店へ到着すると、亭主ははっと驚き、慌てて問いました——「いったいどうしたんですか」

亭主は許宣に、「君が早くに鉄頭と一緒に承天寺へ行ってしば

らくたって、白夫人は私に、〝主人はお寺に遊びに行って来るから、青青と一緒に二階で留守番するように私に言いましたが、まだ帰って来ませんので、私は青青と一緒にお寺の前まで探しに行ってみます。どうか、ご亭主様、私にかわって留守をお願いします〟と言って出て行きました。夜になっても帰って来ないので、私は、あなたと親戚にでも行っていると思っていました」と言います。

役人達は、王亭主に白夫人の居所を尋ね、あちらこちら捜しますが、見つかりません。袁子明は、王亭主を捕えて、大尹に会わせました。

「白夫人はどこにおる」

王亭主は詳しく言いました――「白夫人は妖怪です」

大尹は一つ一つ聞くと、「許宣をしばらく牢に入れておけ」と命じます。しかし、王亭主は、幾許かの賄賂を使って、かたがつくまで保釈してもらい、引きとりました。

しばらくして、周将仕がちょうど向いの茶屋で暇つぶしに雑談していると、家の人が知らせにやって来ました。

「金や財宝などすべて出て来ました。蔵の小部屋の空簞笥の中にありました」

周将仕はそれを聞くと、慌てて家に帰って見ると、ちゃんとあります。ただ、頭巾と環と扇、そしてそのかざりが見えません。

「許宣がぬれぎぬであることは明らかだ。罪の無い者に害を与えるのはよくない」と大尹は思い、そこで裏から働きかけて、許宣を情状酌量にしてもらいました。

さて、李募事は、邵太尉の用事で蘇州に仕事をしに参りました。そして、王亭主の家へ泊ります。亭主は、許宣がここに来てからまた訴えられたことを一つ一つ説明しました。李募事は、「自分の親族であるのに、どうしてほうっておけようか」と思って、上下に賄賂を使って彼のために懇請しました。大尹は、許宣から詳しく自供を聞き、すべては白夫人の起こしたことで、ただ「妖怪の事件を報告しなかった」として、杖で百回打ち、三百七十里遠方に配流ときまり、鎮江府の牢屋に送られ、仕事をさせられることになりました。李募事は言いました――「鎮江に行っても不都合はないよ、私が、義兄弟の契りを結んだ叔父がいて、姓は李、名は克用という。針子橋の下で生薬店を開いているんだ。私が手紙を一通したためるから、君はその人に頼むとよい」

許宣は、義兄にたのんで幾許かの旅費を借り、王亭主と義兄にお礼を言い、護送の二人の役人にお酒と食事をふるまい、荷物をまとめて出かけました。王亭主と義兄は途中まで見送ると、それぞれ帰って行きました。

許宣は、飢えと渇きに苦しみながら昼夜を徹して歩きずくめで丸一日で、鎮江に着きました。まず、李克用の家を訪ねます。針子橋の生薬店へ行くと、番頭がちょうど薬を売っていて、老主人が中から出て参ります。二人の役人と許宣は慌てて挨拶をして、次のように言いました――

「私は、杭州の李募事の家の者です。これは手紙です」

番頭が受け取って老主人に渡しますと、それを見て、「あなたがその許宣さんかい」ときます。許宣は、「はい、そうです」

と答えます。
李克用は三人にご飯を出し、使用人に言いつけて役所に同行させ、文書を提出し、賄賂を使って保釈してもらい、家に帰ります。護送人は証文を受け取ると、蘇州へ帰って行きました。許宣は、使用人と一緒に帰ると、李克用に礼を言い、お上さんにお目通りします。李克用は、李募事の手紙に許宣はもともと生薬店の番頭であると書いてあるのを見て、彼を店に留め、商売を手伝わせ、夜になると、彼は五条巷の豆腐屋の王さんの二階に泊まらせることにしました。李克用は、許宣が生薬店で十分気がつく様子なので心中喜びました。
この店には張と趙という名の二人の番頭がいます。趙番頭は分相応の実直な人でしたが、張番頭は本当にずるがしこい男でした。張番頭は年上であることに頼み、若い人をばかにした取扱いをしました。許宣が新しく入って来たのを知ると、内心穏やかでなく、追い出されるのではと恐れ、たくらみをもったり、彼に嫉妬したりしていました。
ある日、李克用は店に来ると、新来の許宣が商売が上手かどうかと張番頭にききました。
張番頭は、内心、「私のたくらみにはよい機会だ」と思って、こう言いました――「とてもいいにはいいのですが、ただ一つ……」
「その一つとは何かね？」
「彼は大きな買い主には良いのですが、小さな商売の相手にはまるで施しでもするようです。だから人からあまりよく言われていません。私が何度も忠告しましたが、聞かないのです」
「それは簡単だ。私が自分で彼に注意すれば、従わないことはないだろう。」
趙番頭は、そばでこの話を聞くと、こっそり張番頭に言いました――「私達はみなで仲良くしましょう。許宣は新米で、私とあなたで彼を世話しなくてはいけないのだよ。よくない所は、面と向かって言うべきであって、どうして陰で言うのかい。彼が知ったら、私達が嫉妬したと思うだろう」
しかし、張番頭は「おまえのような若い者に、何がわかる」と言うのです。
日が暮れますと、それぞれ家へ帰りました。趙番頭は、許宣の下宿へやって来て話しました――「張番頭さんは君に嫉妬して、ご主人に言いつけていたようだけれど、今まで以上にもっと注意して、大きな取引きも小さな取引きも、同じようにやりなさい」
「いろいろご指南下さってありがとうございます。ところで、一緒に、ちょっと一杯やりに行きませんか」
二人は、一緒に酒屋に行き、向い合って坐りました。店員がいろいろな小皿を並べ、二人は幾杯も飲みました。趙番頭は言います――
「ご主人は、本当にまっすぐな性格の人ですから、手向うと大変です。あなたは彼の性格に従って、辛抱して商売をなさい」
「あなたのご厚意には感謝します。本当にお礼の言いようもありません」
また、二杯も飲むと、だいぶ遅くなりました。趙番頭は「遅くなって、暗くて道が歩きにくいから、日を改めて会いましょう」と言って、許宣が酒代を払うと、別れました。
許宣は、かなり飲んで酔っていて人につきあたるのを恐れて、

家の軒下づたいに歩いて行くと、一軒の家の二階の窓から、捨てたアイロンの灰が許宣の頭上に落ちて来ました。許宣は立ち止まって、「どこのやつだ、眼が見えないのか、何て乱暴な！」と、どなりました。すると、一人の婦人が慌てて下りて来て申します。

「旦那様、お怒りにならないで、私が悪いのです。ついうっかりして…。責めないで下さい」

許宣は半分酔いながら頭を上げてふと見ると、両眼が合います。すると、なんと白夫人ではありませんか。許宣は怒りがこみ上げ、腹の底から憎しみがあふれ出て、無明の炎はふつふつと三千丈の高さに達し、抑えることができずにどなりました――「おまえは、まったく悪賢しこくいやしい化物だ！　巻きぞえにしては私を苦しめ、私は二度も訴訟を食らったのだ」

恨み小さきは君子にあらず、毒無きは丈夫ならず、まさにそれは――

踏破鉄鞋無覚処　破れた鉄鞋はどうしようもなく
得来全不費工夫　得ても、なんの役にも立たない

という言葉の通りです。

許宣は、「おまえは、またここに来たんだな、これでも妖怪でないのか」と言って、とび込んで、白夫人をつかみ、「さあ、裁判でいくか、それとも、私的に済ますか」

白夫人は笑顔を浮かべてこう申します――「あなた、〝一契の夫婦は百夜の恩〟ですわ。話せば長いことですけれど、私の言うことを聞いて下さいな。最初のあの服はみな先夫が残したものです。あなたを深く愛していたから、あなたに着ていただいたのです。恩を仇で報いることになって、反対に恨まれるなんて思いもよりませんでしたわ」

「あの日、私が帰っておまえを訪ねたら、どうしていなかったのだ。亭主が言うには、青青といっしょに寺の前へ私を捜しに行ったそうだが、なぜまた、ここにいるのだ」

「私が寺の前に行くと、あなたが捕えられたと聞きました。青青に聴きに行かせましたが、よくわからず、あなたは逃げてしまったと思い、私は捕まるのを恐れ、慌てて青青に一隻の船を求めさせ、建康府（南京）の伯父の家へ行きました。昨日、やっと、ここへ着きました。私も、あなたに二度も訴訟に巻き込んでどうしてあなたと会えましょう。私を咎めることはないでしょう。互いに思い合って夫婦となったのです。昔のようにうまく運んでいたら、どうして別れることがあるかしら。私とあなたの思いは泰山のように高く、その恩は東海より深く、生死をともに誓いました。日頃の夫婦のよしみで、十分足りますわ。私を下宿に引き取って下さいな。そしてあなたと百年も一緒に過ごしましょう。かえって、良いことではなくて」

許宣は白夫人にまたも騙され、怒りを喜びに変えました。しばしためらっていましたが、結局、色に迷わされ、未練がましく長居して、そのまま下宿に帰らず、白夫人の二階に泊まりました。

次の日、上河五条巷の王さんの二階へ行くと、王さんに、「私の妻が、女中と一緒に、蘇州からここに来ているんだ」と、一部始終を説明し、「私は今ここに引き取って、一緒に暮らしたいのですが」と言うと、王さんは、「そんな良いことに、何も言訳はいらないよ」と喜んでくれました。

その日のうちに、白夫人は、青青と一緒に王さんの二階に引っ

越して来て、つぎの日には隣近所の人々を呼んで披露宴を開きました。三日目には、近所の人が許宣たちを招きます。酒宴を終えると、みな帰っていきました。四日目には、許宣は早く起きて、顔を洗い、白夫人に、「私は隣近所にお礼を言いに行ってから、商売に行くからね。おまえは青青と一緒に、二階で留守番をしていなさい。決して外に出てはいけないよ」と申しつけて、商売に出かけます。早く出かけて、夜には帰って来ます。

さて、月日のたつのは早いもの、一月後のある日、許宣は、白夫人と相談して、主人の李克用の旦那とその母親や家族に会うことにしました。白夫人はこう申しました——

「あなたは、この家で番頭をしていますもの、ご挨拶しておけば今後、いつでも往来や交際に都合が良いですわ」

つぎの日、轎を呼んで家の奥まで入れて、白夫人をそれに乗せ、王さんに小さな箱を持ちせ、女中の青青と一緒に、李克用の家へ行きました。轎から下りると中に入り、主人にとりついでもらうように頼みます。すると、李克用は急いで出て来ます。白夫人は深々と二度お辞儀をすると、母親も二礼します。家族もみな出て来ました。

李克用は年はとってはいますが、ひじょうに色好みですから、白夫人の国をも傾けるようなあでやかな姿を見ると、それはまさに、

三魂不附体　三魂も身につかず
七魄在他身　七魄はここにあらず

といった風です。

李の旦那は目をじっと白夫人を見つめています。すぐにお酒やおかずが並べられ、接待がはじまります。母親は李克用に、こう言います——「ほんとうに利発そうな奥様ね。すばらしくお綺麗で、おしとやかで、落ち着いておらるのね」

李克用も、「さすが杭州生まれだけあって、とても美しい」と申します。お酒を飲み終えると、白夫人は、お礼を述べて帰っていきます。李克用は心中思いました——「どうやって、あの婦人とともに一夜を過すことができるだろうか」。眉を寄せ、心で謀りごとを巡らせます——「六月十三日は私の誕生日だ。慌てる必要はない。あの婦人を私のものにしてみせるぞ」

月日は、鳥が飛び、兎が走り去るように過ぎ、端午の節句も終わり、六月初めとなりました。李克用は言いました——「母さん、十三日は、私の誕生日だろう。酒宴を開いて、親族や友人にゆっくりと過ごしてもらおう。これも一生の楽しみだよ」

さっそく親族や近所の人、店の番頭達など、みなに招待状を出します。つぎの日、方々の家から蠟燭・麺・手ぬぐいなどの贈り物が届けられて来ます。十三日には、みな宴会に来て、一日中飲み食いしました。つぎの日には、婦人達がお祝いに来て、二十人も集まりました。さて、白夫人もやって来ました。すばらしく着飾って、青い金を織り込んだ上衣に真っ赤な紗の裙を着て、頭には精巧な玉や翡翠や金銀の飾りをつけ、青青を連れて奥へ入ると、誕生日のお祝いを言い、大奥さんに挨拶をしました。

宴会は東の小部屋で開かれました。李の旦那は、虱を食べても後脚を残しておくほどの吝嗇な人ですが、白夫人の容貌を見たいばかりにこの計略を設け、にぎやかに酒宴を開いたのです。

さて、それぞれ杯のやりとりをし、お酒がいいぐあいにまわる

と、白夫人は身を起こして服を脱ぎ、手洗いに立ちます。李の旦那は、あらかじめ腹心の女中に、「もしも白夫人が手洗いに立ったら、おまえは、表の手洗いを避けて、奥の手洗いに案内するんだよ」と言いつけておきました。旦那は、すでに手筈を整え、先に裏で身をひそめています。まさに、

不労鑽穴踰墻事　穴をあけ屏を越える労もなく
穏做偷香竊玉人　こっそり美人を誘惑する

とはこのことです。

しばらくすると、白夫人は本当に手洗いに立ちました。女中は彼女を表の手洗いを避けて裏手の方へ案内し、もどってきました。李の旦那は心中淫らな思いで身はここにあらずといった風でしたが、思い切って入って行けずに、戸の隙間から覗きます。覗かなければ何事もなかったでしょうが、見てしまったので、主人はあっと驚いて、身を翻して逃げ出し、奥まで来ると仰向きに倒れてしまいました。

不知一命如何　命がどうなるかわからぬが
先覚四肢不挙　先ずは手足が動かない

という状態です。

李の旦那の目には、花のような玉体は見えず、厠には、ただ、とぐろを巻いた一匹のつるべ桶ほどの太さの白蛇がいて、灯盞のような両眼から、金の色を放っている姿です。驚きのあまり気も失せんばかりに身を翻して歩いているうちに、つまづき倒れてしまったのです。

女中達が助け起こすと、旦那の顔は真っ青です。番頭は慌てて安定剤を飲ませると、やっと目覚めます。大奥さんやほかの人達が来て、「いったい何に驚いて、こんなおかしな風になったんですか」とききますと、丹那は事実を言わずに、「私は今日は、朝早く起きたので、毎日の疲れで頭痛がして倒れたのさ」と言って助けてもらい、部屋にこもって休みました。

親族や友人達は、再び席にもどって、幾杯か飲みます。酒宴は終わり、みな礼を述べて帰宅しました。

白夫人は家に帰ると、翌日、李克用が店で許宣に真相を話す事を恐れ、一計を思いつきました。衣服を脱ぐと、すぐにため息をつきました。許宣は、「今日は酒宴に行ったのに、なぜ帰るとため息をつくんだい」とたずねます。

「あなた、口で言えないくらいよ。李の旦那は、もともと誕生日といったって、心で良くない事を考えていたのですわ。私が手洗いに立つと、あの人は裏に身にひそめていて、私を騙して襲おうとして、裙（スカート）を引っぱったり、褲（ズボン）を引っぱったりして、私をからかうのよ。私は叫ぼうと思ったけれど、皆様はあちらにいらっしゃるし、面子（メンツ）を傷つけたらいけないと思って、私が彼をちょっと押し倒したら、あの人は、恥ずかしいものだから、目まいがして倒れたと嘘をついたのよ。くやしいわ、どうやってこの怒りをぶちまけようかしら」

「おまえが汚されたわけではないし、彼は私の主人だし、仕方がないよ。耐えておくれ。これからは行かなければいいだろう」

「あなた、私の仇を討って下さい。それでなくては男とは言えないわ」

「義兄さんが手紙を書いてくれたから、私は李の旦那の家に身を寄せることができたのだよ。おかげで彼も私を店で番頭にしてく

れたのさ。いまさら、私はいったいどうしたら良いというのかい」
「あなたは男でしょう。私があんな人にこんな風にばかにされても、あなたはまだあの家に行って、番頭をしようと言うの」
「おまえは、私がどこに行って身を立てろと言うのかい。何をして暮らしをするのかい」
「人の家の番頭は卑しい仕事ですわ。せめて自分で生薬店を開いた方がいいわ」
「せっかくの話だが、しかし、その資金は、どうするのかい？」
「あなたは安心していて。簡単よ。明日、少し銀子を用意しましょう。あなたは先に家を借りて来て。話はそれからよ」
さて、「今は昔、昔は今」と申します。熱心な世話好きな人はどこにでもいるもので、隣に、姓は蔣、名を和と言って、太鼓持ちをしている世話好きな人がおりました。次の日、許宣は白夫人に幾許かの銀子をもらうと、蔣和と鎮江の渡し場の馬頭へ行き、一軒の家を借りました。生薬の戸棚を一揃い買って、生薬を買い入れます。十日前後ですべてが完備し、日を選んで薬店を開店します。もう番頭ではありません。あの李旦那も、自分が、心中やましいことがありますので、呼びに行きません。
許宣が自分の店を開くと、日に日に商売は繁昌し、大いに儲けました。ちょうど店で商売をしていると、一人のお坊さんが、一冊の布施帳を持ってやって来ました。
「わしは金山寺の和尚じゃ。今度の七月七日は、英烈龍王の誕生日でござる。どうか、貴殿もお寺にご焼香に来られて、お線香の香代をお布施下さるようお頼み申す」と許宣に言います。
許宣は、「名を書く必要はありませんよ。私のところにょい降真香があります。差し上げますから、焚いて下さい」と言って、すぐに戸棚から取り出すと、僧に渡します。お坊さんは受け取ると「その日は、ぜひ貴殿もご焼香にお越し下され」と言って合掌し、去って行きます。
白夫人はそれを見ると言いました「馬鹿ね、こんな好いお香を上げるなんて。あの悪賢しこい坊主は、きっとお酒や肉に換えて食べてしまうわ」
許宣は、言います――「私は自分の真心から寄付したのだよ。お金をむだにしても、それはあの坊さんのせいだよ」
いつしか七月七日となり、許宣がちょうど店を開くと、街は賑やかに人が行き来しています。太鼓持ちの蔣和は、許宣に言いました――「許宣さんは、先日、お香をお布施したでしょう。今日はどうしてお寺へ行ってお参りなさらないんですか」
「よし、今かたづけるから、ちょっと待っていて。一緒に行こう」
「私もお供しましょう」と蔣和は申します。
許宣は急いでかたづけると、奥へ入って白夫人に言います――
「私は、金山寺にお焼香に行くから、おまえは家で店番をしていなさい」
「〝用も無しに、三宝殿へ登るな〟と諺に申します。何をしに行くのですか」
「ひとつには金山寺を知らないから、ちょっと行って見て来ようと思うのと、もうひとつには、先日、布施をしたので、焼香したいと思うのさ」

「あなたが行くと決めているなら、私が止めても行くでしょう。ただ、私はあなたにお願いが三つあります」
「三つとは何だね」
「ひとつは、方丈の内に入らないこと。ふたつはお坊さんと話をしないこと。三つは、行ったらすぐ帰ること。遅くなったら、私はあなたを捜しに行きますよ」
「差し支えがなさそうだから、三つとも守るよ」と言って、すぐに、新しい服と靴と靴下に換え、袖にはにおい袋を入れ、蔣和と一緒に河辺へ行き、船に乗って金山寺へ向います。
まず、龍王堂でお詣りをして、お寺のまわりをぶらぶらとひと廻りし、人々についていくと、方丈の前に着きました。許宣は、急に気がついて、「妻から、方丈の中へは入らないように と言われたな」と思い、立ち止まって入りません。蔣和は、「大丈夫ですよ。奥さんは家の中だし、帰ったら入らなかったと言えばいいですよ」と言うので、入ってぐるりと見ると、すぐ出て来ました。
さて、方丈の中央に坐っているのは、一人の徳の高い和尚です。眉は秀で、目は涼しげで、きちんと整った方袍を着て、見るからに、その様子は真の高僧の風情です。許宣が通り過ぎるのを見ると、侍者に、「急いであの若者を連れて来なさい」と申しました。侍者は、ひと廻りして見て来ましたが、人が多くて人波にどんどん流されてしまい、どんな人だったか見分けがつかなくなり、帰って申し上げます――「いったいどこに行ったのかわかりません」
和尚さんはそれを聞くと、錫杖を持ってみずから方丈を出て行き、あちこち尋ねますが見つかりません。
さて、お寺の外では、大勢の人々が船に乗ろうと風波が静まるのを待っています。ところが風と波はだんだんひどくなります。
「とても行けないよ」と言っていると、ちょうどその時、一隻の船が、長江をまるで飛ぶように走って来ます。許宣は蔣和に、「こんな大波で渡りたくとも渡れない。あの船はなんでこんなに早いのだろうね」と話しているうちに、船は早くも近づいて参ります。見ると、白い服の婦人と青い服の女の子です。岸辺に着いたのを見ると、なんと白夫人と青青ではないですか。許宣の驚きは、もうたいへんなものです。白夫人は、岸に着くと言いました――「あなた、どうして帰って来ないの。早くお乗りなさい」
許宣が船に乗ろうとしていると、誰かが後ろでどなっているのが聞こえました――「こいつめ、ここで何をしている！」
許宣が振り返ると、人々が「法海禅師様がお出ましだ」と言っています。
「こいつめ、またもや無礼を働き、生霊を害するのか。わしはおまえのために、特にやって来たのだぞ」と和尚は一喝します。
白夫人は和尚を見ると、船を漕ぎ出し、青青と一緒になって船を引っくり返すと、二人とも水の底へ潜っていきました。
許宣はお坊さんの方に向いて、手を合わせて拝みながら言いました――「禅師様、どうか私のはかない命をお助け下さい」
「そなたは、どのようにして、あの女と出会ったのかな」
許宣は、今までの事情を順に説明します。禅師はそれを聞くと、「あの女は、まさに妖怪だ。そなたは、すみやかに杭州へ立ち去るがよい。ふたたび、そなたに纏わりついて来たら、西湖の南の浄慈寺を訪ねて来なさい」

それはつぎの詩の四句の通りです――

本是妖精変婦人　本より是れ妖精、婦人に変じ
西湖岸上売嬌声　西湖の岸上、嬌声を売る
汝因不識遭他計　汝、その計（はかりごと）に遭うを識らぬに因り
有難湖南見老僧　まさかの時は、湖南の老僧を訪ねよ

許宣は法海禅師に礼を述べ、蔣和と一緒に渡し船に乗って長江を渡り、家へ帰りました。白夫人と青青は二人とも家にはおらず、ようやく妖怪であったことがわかります。夜になると、蔣和とともに過ごし、心中悶悶として一睡もできません。

つぎの日、早く起きると、蔣和に留守番をたのみ、針子橋近くの李克用の家へ行き、前の事情をひと通り告げます。李旦那は、「私の誕生日の時に、彼女が手洗いに行くのにぶつかって、偶然あの妖怪を見てしまい、死ぬほど驚いた。私はおまえに、思い切って、その話を話す事ができなかった。そういうことだったら、私の家へ引越して住むとよい。何も心配はいらないよ」と言います。

許宣は礼を言い、また李旦那の家へ越して来ることにしました。早くも二カ月余りが過ぎ、ある日のこと、門の前に立っていると、土地のまとめ役が香花灯燭を飾って、朝廷の恩赦があることを一軒一軒言いふらしています。というのは、宋高宋が後嗣に孝宗を策立されたので、天下に恩赦を下したのです。人命の大罪を犯した人を除く小罪の人々を全部恩赦にして家に帰すこととなりました。許宣は恩赦を受けて、嬉しさを抑えきれず、つぎの詩を一首詠みました――

感謝吾皇降赦文　わが皇帝の恩赦に感謝す
網開三面許更新　〔法〕網三面を開きて許しはさらに新た
死時不作他邦鬼　死してあの世の鬼とならず
生日還為旧土人　生まれてまたこの地の人となる
不幸逢妖愁更甚　不幸にも妖怪に逢い愁いさらに甚し
何期遇宥罪除根　いつか宥罪に遇いて禍根を除かん
帰家満把香焚起　帰宅して家中に香を焚きこめん
拝謝乾坤再造恩　乾坤を拝謝してまた恩に報いん

許宣は詩を吟じ終えると、旦那の李克用に頼んで役所の上下に賄賂を使って運動すると長官に会うことができ、故郷に帰れることとなりました。隣近所の人々や李克用の母親や家人、二人の番頭に礼を述べ、別れを告げます。太鼓持ちの蔣和に頼んでみやげ物を買い、杭州へ帰りました。

家へ帰り着きますと、姉夫婦に会い、何度もお礼を述べました。義兄の李募事は、許宣を見ると待ちかねたように、せっかちに言いました。「おまえは、よくも私を小馬鹿にしてくれたね。私は二度も手紙を書いて、おまえを人に頼んでやったのだ。おまえは李克用の家で、妻を娶ったというのに、手紙も書いてよこさず、私は知らされたよ、あんなに仁義に欠けているのかとね。」

許宣が、「私は妻などもらっていませんよ」と言いますと、義兄はこう申します――「現に二日前、一人の婦人が女中を連れておまえの妻だと言って来ているよ。おまえが、七月七日、金山寺にお参りを行ったきり帰らず、捜しても見つからなかった。後になって、杭州へ帰ったと聴いたので、女中と一緒に、先にここへ来て、二日もおまえを待っているよ」

そして、その婦人と女中を呼んで許宣に会わせます。見ると、なんと白夫人と青青ではありませんか。許宣は彼女らを見るなり、目をきょとんとさせ、口をあんぐりあけて驚いています。姉夫婦の前でその経緯を話すこともできず、ただこの場は、義兄の非難をそのままに受けておくことにしました。

義兄の李募事は、許宣と白夫人を一間の部屋に落ち着かせます。日が暮れると、許宣は白夫人が恐ろしく、心中は慌てていました。思い切って白夫人に向い、地にひざまずいて言いました。「あなたは何の神様であられるのかは知りません。どうか、私の命だけはお許し下さい」

「あなた、それはどういうことですの。私とあなたは長いあいだ許し合った夫婦で、あなたを一度も裏切ったことはないでしょう。どうして、情けないことをおっしゃるの」

「あなたと知り合ってから後、二度の訴訟を受け、掛わり合いになった。私が鎮江府へ行くと、あなたはまた私を訪ねて来た。この前、金山寺へお参りに行き、帰りが遅くなると、あなたは青青と一緒にまたすぐ追いついて来た。禅師を見ると、すぐ長江へ飛び込んだ。私はてっきり、あなたは死んだと思った。ところが、あなたはまた先にここへ来ていた。どうか私を憐れんで、助けて下さい」

白夫人は、妖しい目を丸くして申します――「あなた、私はただよかれと思ったことなのに、誰が怨みに思ったのかしら。私とあなたは今まで夫婦として同衾して来たのではありませんか。多くの恩や愛情を許し合った仲なのに、いまさら別の人の言葉を信じて、私達の夫婦の仲を裂こうとでもいうの。私はいまはっきりと言いますわ。もしも私の言葉を聞いて下さるならば、本当に嬉しく、万事うまく収まります。でも、もしもほかの心をお持ちでしたら、私はこの町すべてを血の海に満たし、人々は浪に呑まれ、濁水に沈み、みな命をおとして死んでしまいますよ」

許宣は驚いて、ただぶるぶると震え、しばらく返す言葉もありません。思い切って近づくこともできずにいますと、青青が、「許宣さま。奥様は、あなたの杭州人らしい男らしさを愛し、また、あなたの愛情の深さを喜んでおられるのです。どうか私の言うことを聞いて、奥様と仲良くして、疑ったりするのはおやめ下さいな」と言ってとりなします。許宣は二人に纏わりつかれ、「ああ、かえって苦しくなったよ」と叫びます。

すると、中庭で涼んでいた姉がその叫びを聞いて、慌てて部屋の前へ来ると、二人が喧嘩をしていると思って、許宣を引っぱり出します。白夫人は部屋の扉を閉めて寝てしまいました。

許宣は、前からの経緯を、詳しく姉に話します。ちょうど、義兄が涼みに出ていた散歩から帰って来ました。姉は、「あの二人は争っていたのよ。もう寝てしまったかも知れません。あなた、ちょっと行って見て来て下さいな」と言います。李募事は、部屋の前に行くと、中は真っ暗で明りもありません。そこで、舌先で窓の紙を破って、覗かなければ万事何事もなかったでしょうが、いったん覗いてしまったのでさあ大変。見れば、一匹のつるべ桶ほどの太さの大蛇が眠っており、頭を天窓から出して涼んでいます。鱗から白い光を放ち、部屋の中を昼と同じように照らしています。驚いて逃げもどりますが、部屋に帰っても、そのことには触れず、「寝ていたよ、声もしなかった」と言います。許宣は姉

の部屋に逃げ込んで、思い切って出て来れません。義兄もその晩はそれ以上なにもいいませんでした。

一夜が過ぎてあくる日、李募事は許宣を呼び出し、人目のつかぬ静かな所で尋ねます——

「おまえは妻をどこから娶ったのかい。本当のことを言いなさい。嘘をつくことはないよ。私は昨日、あれが一匹の大きな白蛇であることを、この目でしっかりと見たんだ。私は、おまえの姉さんが怖がると思って、言わなかったんだよ」

許宣は、事の一部始終を義兄に話しました。李募事は、「そういうことなら、白馬廟の前に蛇取りの戴先生という人がいて、上手に蛇を捕まえるようだ。一緒に迎えに行こう」と言って、二人で白馬廟の前まで行きました。すると、戴先生が、ちょうど門の前に立っています。

「先生、ご機嫌よう」と、二人が声をかけると、戴先生は「何かご用ですか」と申します。

「家に一匹の大蟒がいるので、捕まえていただきたいのです」

「お宅はどちらですか」

「軍将橋を越した黒珠巷の李募事という家ですが」と言って一両の銀子を取り出します。「先生、この銀子をお収め下さい。蛇を捕えていただければ、またお礼はしますよ」

先生は、それを収めると、申します——「お二人、どうぞ先にお帰り下さい。私は後から行きますから」

李募事と許宣が帰りますと、その先生はさっそく雄黄薬水を瓶に入れ、まっすぐに黒珠児巷に行き、李募事の家を人に尋ねますと、「あちらの、あの二階屋がそうですよ」と指さします。先生は、門前で簾をあげて一つ咳払いをしますが、人っ子ひとり出て来ません。しばらく門を叩いていますと、すると一人の若い奥さんが出て来ていいます。

「どなたをお訪ねですの」

「ここは李募事さんのお宅でしょうか」

「そうですわ」

「お宅に一匹の大蛇がいるとおっしゃって、たった今、二人の旦那様が、私に蛇を捕えるように、ということでした」

「我家に大蛇が？　あなたはお間違いではないですか」

「旦那様は、先に私に一両の銀子を下さいました。蛇を捕えた後には、たくさん謝礼を下さるとおっしゃいました」

「いけません、あなたは担がれているのです。信じてはいけませんわ」

「なんで、そんな事がありましょう」

白夫人は何度も断わりましたが、戴先生は帰りませんので、怒って言いました。「あなたは本当に蛇が捕えられるの？　あなた恐くて捕えられないのではなくて？」

戴先生は、申します——「私は、先祖八代の昔から、蛇取りの名人と呼ばれて来ました。たった一匹の蛇がどうして捕えられないことがありましょう」

「あなたは捕えられるとおっしゃるけど、見れば恐れて逃げ出すわよ」

「逃げませんよ。もしも逃げたら、罰として白銀を一枚差し上げますよ」

「それじゃ、私についていらっしゃい」

中庭まで来ると、その婦人は、角を曲って入って行きます。戴先生は、瓶を下げて空地に立っています。しばらくすると、一陣の冷たい風が吹き過ぎたと思うと、一匹のつるべ桶ほどの太さの蟒がいて、すぐに飛びかかって来そうな様子です。まさに、

人無害虎心　人には虎を殺す気はないが
虎有傷人意　虎は人を食べたがる

といった有様です。

さすがの戴先生も、あっと驚き、ばったり倒れると、雄黄薬の瓶も割れてしまいました。大蛇は血のように紅い口を開いて、雪のように白い牙をむき出しにして、先生にかみつこうとします。先生は慌てて立ち上がり、父母が足を二本だけで生んだのを恨みながら一目散に橋を渡ると、ちょうど戻って来た李募事と許宣にばったり会いました。

「どうなさいったんですか」と許宣が尋ねると、先生は、「お二人に、よいことをお教えしますよ。」と、いま起った事を一部始終話します。一両の銀子を取り出して李募事に返しながら、「もしも、私にこの二本の足がなかったら、命までも失ってしまう所でしたよ。お二人は別の人に頼んで下さいよ」と、急いで立ち去って行きました。

「義兄さん、いったいどうしよう」

「どう見たって、これは妖怪だよ。赤山埠の前にある張成の家に、私は一千貫文の貸しがあるから、おまえはあそこの静かな所に行って、部屋を一間貸りて住むといい。あの怪物もおまえがいなくなれば、どこかに行ってしまうよ」

許宣は、どうしようもないので承知します。義兄と一緒に家へ帰ると、がっくりと意気消沈して動こうともしません。李募事は手紙を書くと、証文と一緒に封をして、許宣を赤山埠へ行かせようとしました。すると、白夫人が許宣を部屋に入れて、こういいます――「あなたってひどい人ね。どうして蛇取りなどを呼んで来たの。でも、もし貴方が私にやさしくしてくれるなら、今度は大目に見ましょう。でも、これからもしもやさしくしてくれない時は、この町のすべての人を巻き添えにして、苦しめ、みんな命を落とすことになりますよ」

許宣はそれを聞くと胆をつぶし、一言の声も出ません。証文を持って悶々と赤山埠の前までやって来ました。張成を訪ねて、さっそく袖から証文を取り出そうとしますと、その証文がありません。にがりきって慌てて来た道を引き返してみましたが、見あたりません。すっかり困りきっていると、ちょうど浄慈寺の前に来ました。

ふと思い出したのは、あの金山寺の法海禅師が言っておられた、「もしあの妖怪が再び杭州に来ておまえに纏わりついたら、浄慈寺に私を訪ねて来なさい」という言葉です。いま行かなければ一体いつ行くのだと、急いで寺に入り監寺に尋ねます――「お尋ねします、お坊様。法海禅師様は、このお寺におみえになっていらっしゃいますか」

「おいでになりません」と、その監寺の僧は申します。

不在と聞いて、許宣はさらに憂鬱になり、長橋のたもとまで引き返し、独り言を言いました――「運が悪くなると、化物にまで弄ばれる。私の命なんか、もうどうなっても構わない」

そして湖の清水を見つめて、飛び込もうとしました。それはま

さに、

閻王判你三更到　閻魔様がこう決めたなら
定不容人到四更　何時までまってもお許しになるまい

という心持ちです。

許宣が飛び込もうとしますと、後ろから、誰かの声が聞こえて来ました――「男であるのに、なぜ生を軽んじるのか。命あってのものだねだ。なぜ私に相談しない」

許宣がふり返って見ると、まさに法海禅師その人ではありませんか。背には衣鉢を担ぎ、手に錫杖を持っている姿は、ちょうどいま旅から戻って来たばかりのようです。これも命がまだ尽きなかったからで、飯一杯を食べる時間でも遅かったら、彼の命も終わっていたでしょう。許宣は禅師を見ると、頭を下げお願いしました――「どうか私の命を助けて下さい」

「あの畜生はどこにいるのだ」と禅師は尋ねます。

許宣は今までの事を詳しく話し、「そうして、ここにやって来たのです。禅師様、どうか命を助けて下さい」

禅師は袖から一個の鉢を取り出すと許宣に渡し、「おまえは家に帰ったら、女に知られないように、こっそりとこの鉢を頭からかぶせ、決して手を弛めてはならんぞ。しっかりと手でおさえ、慌ててはいかん。さあ、すぐ帰りなさい」

さて、許宣は禅師に礼を言って、帰ります。すると、ちょうど白夫人が座って、口の中でぶつぶつと罵っています。

「知らない人が私のあの人をそそのかして、私たちを裂こうとしている。誰かわかったらどうしてくれようか」

ちょうど気持が他所を向くのを待っていた許宣は、眼をこらして、背後からこっそりと近づくと、白夫人の頭に鉢をすっぽりとかぶせて、気力を振り絞って押さえました。すると、女の姿は見えなくなります。ゆっくりと鉢を押さえるに従って、手をはなさず、手をぬかず、しっかりと押さえます。鉢の中から、「あなたとは、何年も夫婦でしたのに、一かけらの人情もないのですか。どうかちょっと放して下さいな」と言う声が聞こえます。

許宣がためらっていると、一人のお坊さんが「妖怪を捕えてやろう」と言っていると、人が知らせに参ります。許宣はそれを聞くと慌てて、李募事に、禅師に入っていただくようたのみます。奥へ禅師が入って来ますと、許宣は「どうか私を助けて下さい」と言います。

禅師は口の中で何やら念じ、念じ終えると、そっと鉢をあけます。すると、白夫人は七、八寸の長さに縮んで、操り人形のようです。両目を堅く閉じて地面に一つの山のように伏せています。禅師はどなりました――「何の畜生の妖怪か、なぜ人に纏りつくのか。ありのままを申せ」

白夫人は申しました――「禅師様、私は一匹の大蟒でございます。雨風が起こったので、西湖へ行って身をおちつけ、青青と一緒に住んでおりました。思いがけず許宣さまにお会いして、心は高ぶり、じっとしておれず、一時、天の決まりを犯してしまいました。しかし、殺生はしておりません。禅師様、どうかお慈悲をお願い申します」

禅師はさらに、青青は何の妖怪かと問いますと、白夫人は申します――「青青は、西湖の第三橋の淵にいる、千年を経た青魚です。ふと巡り会ったので、彼女を仲間にしました。彼女は一日も

楽しんでおりません。禅師様、どうか憐んでやって下さいませ」
「おまえの千年の修練に免じて、命だけは助けよう。さあ本性を現せ」
白夫人が否定しますと、禅師は大いに怒り、口の中で経文を唱えて「掲諦はいずこにおるか、すぐに私に青魚の怪を捕え、白蛇とともに姿を現わさせよ。私が処罰してやろう」と大喝します。
すると、たちまち庭に一陣の狂風が起こり、それが通り過ぎると、がらがらと刺すような大きな音が聞こえ、空中から一匹の青魚が落ちてきました。一丈もの長さです。地面でぴちぴちと跳ねているうちに、一尺あまりの長さに縮まって、一匹の小さな青魚になりました。白夫人を見ると、これも、もとの姿に変えって、三尺の長さの一匹の白蛇に変わり、依然として頭を高く上げ、許宣を見つめています。禅師は、その二つのものを鉢の中へ入れ、衣の端を引き裂くと、それで鉢の口を封じました。
そして雷峰寺の前へ鉢を持って行き、地に置くと、人々に、煉瓦や石を運ぶように命じ、煉瓦をつんで、一つの塔を造るように指図しました。その後、許宣は寄進を募り、煉瓦を積んで、七層の宝塔を建てました。こうして、その後、千年も万年も、白蛇と青魚は世に出ることはできなくなりました。
さて、禅師は、この二匹の妖怪をおし鎮めると、四句の偈を作りました。

西湖水乾　西湖の水乾くとも
江湖不起　江湖起らず
雷峰塔倒　雷峰の塔倒れれば
白蛇出世　白蛇世に出でん

法海禅師は偈を唱え終えると、さらに八句の詩で、後世の人々を戒めました。

奉勧世人休愛色　世人に忠告せん、好色を慎しめと
愛色之人被色迷　好色の人、色に迷わされん
心正自然邪不擾　心正しければ自ずと邪は擾がず
身端怎有悪来欺　身端なればなんぞ悪来りて欺くや
但看許宣因愛色　ただ看よ、許宣の好色に因るを
帯累官司惹是非　お上に繋がれしもこの是非のためなり
不是老僧来救護　もし愚僧来りて救護せざれば
白蛇呑了不留些　白蛇は呑みて留まるものなかりしを

法海禅師が、吟じ終えると、人々は散っていきます。ただ、許宣だけが、出家を願い出て、禅師を師と仰ぎたいと、礼拝します。そこで、雷峰塔で剃髪し、僧となりました。修行すること数年のち、ある夜、坐ったまま亡りました。僧達は、厨子を買って荼毘に付し、一座の骨塔を造り、千年のあいだ朽ちないようにしました。許宣は、この世を去る時に臨んで、つぎのような八句の詩で世の人を戒めたといわれます――

祖師度我出紅塵　祖師の教えで俗世をのがれ
鉄樹開花始見春　鉄樹の花咲く春を見る
化化輪廻重化化　めぐる輪廻はまためぐり
生生転変再生生　生々流転し　また生まる
欲知有色還無色　有色は無色に還えりゆき
須識無形却有形　無形は有形に変わりぬる
色即是空空即色　色即是空、空即色
空空色色要分明　空空色色、分明を要す

〈了〉

解題

〈白蛇伝〉は、杭州西湖にあった雷峰塔の縁起にまつわる民間説話である。白蛇が美女に化けて若い男と交わる話は南宋の頃からすでにあって、話本として受け継がれて来たが、それが書かれた文学として世に現れるのは、小説が広く流行する明代中期以降のことである。嘉靖二十年代（一五四一～五〇年）に洪楩が編集した『清平山堂話本』の中の《西湖三塔記》には、雷峰塔の名はみえないが、白蛇伝説の古い形が見られる。文中には、蘇東坡らの詩をあげて西湖の景観のすばらしさを讃えており、その言葉づかいに、本来、読むものではなく、聴かせるものであったことをうかがわせる。このように、明代に、古来の口承文学は、瞽者などの〝説話人〔講談師〕〟の手から離れて文人の余業となり、読むための白話文学（口語文学）へと変化していった。

ここに訳出した《白蛇伝》は、明末の天啓年間（一六二一～二七年）、蔵書家の馮夢竜が編集した短編小説集『警世通言』の中の第二十八話《白娘子永鎮雷峰塔》である。馮夢竜は蘇州の人で、晩年に福建省寿寧県の知県として三年ほど在任した以外は蘇州に住み、通俗文芸の編集に熱意を注いだ。彼が編集した『諭世明言』『警世通言』『醒世恒言』のいわゆる〝三言〟は、題名の「世を諭す」「世を警める」「世を醒ます」が示すように、民衆を教化する意図をもっており、露骨な勧善懲悪の作品も少なくない。それは、口語文学の通俗性に対する知識人の抵抗とも受け取れるが、しかし、教化一色というわけでもなく、妖怪や盗賊や、あるいは明代の事件に取材したものもあり、また、馮夢竜自身の作も含まれている。〝三言〟と並んで知られる凌濛初編の『拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』のいわゆる〝二拍〟は、典型的な娯楽読物として書かれている。《白蛇伝》も、結末に仏教の勧戒があるものの、小説の主眼は白夫人の妖艶であわれな女性の「さが」に置かれている。

西湖は江省杭州の西にある湖で、湖畔の風光明な景色が有名である。古くは越国に属し、のち東晋の干宝の『搜神記』に「上湖」の名称で登場する。中唐に白居易（白楽天）が刺吏として赴任し、また北宋には蘇軾が知州となって堤防の補修などに治蹟があったことは《白蛇伝》の中にも見える。南宋が臨安（杭州）に都してからは、西湖を舞台として数々の物語が生まれ、右に述べた〝三言二拍〟にも幾篇か収められている。

その後、元代には西湖は荒れたが、明代には修治が加えられ、嘉靖年間、田汝成が『西湖遊覧志』を著わし、西湖に関する記録を集大成した。清初期には湖水の整備に力が注がれ、この時期に、『西湖佳話』十六巻、『西湖拾遺』四十八巻などの大著が出版された。『警世通言』の《白娘子永鎮雷峰塔》は、『西湖佳話』に《雷峰塔怪路》として収められた。《白蛇伝》が文芸に与えた影響は大きく、明末の万暦年間、陳六竜が《雷峰塔伝奇》と題する戯曲を書いたが、伝わっていない。現代では、田漢の脚本《白蛇伝》や、張恨永の小説がある。また日本でも、江戸中期に上田秋成が白蛇伝を翻案して、『雨月物語』の中に《蛇性の淫》を書いたことは周知の通りである。

なお、雷峰塔は北宋の西暦九七五年に呉越王銭俶によって西湖南岸の雷峰の頂きに建てられ、北岸宝石山頂の保叔塔とともに西湖に景観を添えていた。一九二四年九月二十五日に塔は自然倒壊するが、その経緯は魯迅の《雷峰塔の倒壊》に記されている。